



マラソンは 街を元気にする新しい「祭り」

関西大学が「第1回大阪マラソン」に協賛

■対談
七條 昌一 楠見 晴重
大阪マラソン組織委員会 事務局長 学長
大阪陸上競技協会顧問

■リーダーズ・ナウ —5
在学生— 体育会陸上競技部
社会学部4年次生 松本 真由子さん
卒業生— 「エンビツ工房」真島事務所
株式会社イグザミナ 代表主幹
真島 弘さん

■研究最前線
現場の“感覚”を活かすスポーツ科学の研究
頭で理解して、感覚で実践する —7
人間健康学部 — 小田 伸午 教授
インタラクションデザインの研究
機能と使いやすさを両立させる —9
総合情報学部 — 松下 光範 教授

■トピックス [学内情報] —11
東日本大震災に関する関西大学の取り組み
経済的支援を継続、ボランティア活動を展開
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
2件の研究が採択、全国第1位の実績

■社会貢献・連携事業/地域連携 —13
第1回堺キャンパス祭を開催
「スポーツ」「福祉」を学ぶキャンパスで地域交流
「Hop Step Jump!! ～みんなを笑顔に～」



第4回関西大学「氷の甲子園」を開催
ジュニアフィギュアスケート演技会・
トップスケーターエキシビジョン
「高橋大輔・織田信成先輩に続け！」

奈良県葛城市と連携協力に関する協定を締結

■関大ニュース —15
英語指導力開発ワークショップを実施 ほか

THINK ACT
KANSAI
UNIVERSITY
大阪から日本を元気に！
関西大学×大阪マラソン



マラソンは 街を元気にする新しい「祭り」

関西大学が「第1回大阪マラソン」に協賛

- 七條 昌一 ・大阪マラソン組織委員会 事務局長 / 大阪陸上競技協会顧問
- 楠見 晴重 ・学長



関西大学は、10月30日に開催される「第1回大阪マラソン～OSAKA MARATHON 2011～」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)に協賛する。「マラソンを通じて大阪の街を元気に」という趣旨に賛同し、協賛団体として大会運営に協力するとともに、マラソンや大阪の魅力を紹介する一般市民向け公開講座、給水ボランティア、語学ボランティア、応援イベントなど、さまざまな取り組みによって大阪・関西の活性化に貢献する。

◆40歳を超えても長距離を走れる

楠見 関西大学は今年、前身である関西法律学校の設立から数えて125周年を迎えます。この間、大阪とともに歩み、大阪とともに成長し、大阪の地に根を張ってきた大学です。最近では大阪市北区役所や天神橋筋商店連合会と連携協力に関する協定を結び、地域貢献にも積極的に取り組んでいます。今回、大阪独自の新しい「イベント」として3万人規模の市民マラソン大会が開催されるにあたり、大阪を拠点とする総合学園として、このイベントに加わり、盛り上げることで、大阪・関西の活性化、元気な大阪の復活に少しでも貢献したいと考えています。

大阪マラソン組織委員会事務局長の七條さんは、大阪ガスの陸上部で長年、選手をご指導なさってきたと聞いています。大阪マラソンのお話の前に、ご自身の陸上競技とのかかわりを少しお聞かせください。

七條 私は中学時代から陸上競技をやっていましたが、学生・実業団(大阪ガス)時代は大した選手ではありませんでした。私は現役引退後、長年大阪ガス陸上部のマネージャーと女子のコーチを務めてきました。昭和50年ごろから、日本のトップクラスの中長距離の女子選手が入ってくるようになりましたが、コーチであった私は、若い時よりも中年になってからの方が、練習に真剣に取り組むようになりました。というのは、マスターズ陸上という40歳以上で5歳刻みの年齢別の大会が盛んになり、それを目指して若い選手たちと一緒に練習していると、若いころと同じぐらいの記録で走れるようになったのです。日本マスターズ(1,500メートル、45歳の部)では第2位の成績を収めることもできました。

そして、定年退職と同時に、大阪陸上競技協会の仕事を手伝うことになり、18年間、協会の事務局次長・事務局長を務めました。その後2010年4月1日に大阪マラソン開催準備委員会の事務局が発足し、その時から参画させていただくことになったしだいです。

楠見 実は、私は昨年の4月、本学が協賛している堺シティマラソンに参加し、4.5キロコースを走りました。それ以来、毎朝6時に起きてジョギングを続けています。最初はしんどかった

のですが、今は汗をかいた後でシャワーを浴びるのが気持ちいいですね。体もかなり健康的になっているのではないかと考えています。

七條 私が若いころは5,000メートルから10,000メートルぐらいが精いっぱい、フルマラソンなんて走る人は特別な能力を持った人たちだと考えていました。私は1,500メートルがいちばん好きでした。ところが、40歳を超えてからだんだん距離を長くしても、案外走れるもんだなあと感じました。

◆3万人参加の「チャリティ・マラソン」

楠見 「第1回大阪マラソン」は、3万人の定員に対して17万人を超える応募があったそうですね。これほど人気があることを予想されていたのですか。

七條 総エントリー数は171,744人で、そのうちマラソンが定員28,000人に対して154,822人、チャレンジランが定員2,000人に対して16,922人でした。東京マラソンの状況からみて、私なりに計算をして174,000人になるという予想を立てていました。そうすると、ほぼそれに近い数字が出て驚きました。

海外からは、中国、台湾、アメリカなど、計29カ国約1,100人の方が参加されます。国際色豊かな大阪マラソンを、将来にわたって世界的にも注目される大会に育てていきたいと思っています。

楠見 大阪マラソンには、どのような特色がありますか。

七條 まず、大阪マラソンは「チャリティ・マラソン」であると位置づけています。チャリティに賛同いただける方が、大阪マラソンのランナーです。大阪マラソンが日本のチャリティ文化の火付け役になればと考えています。大会のテーマである虹の7色にちなんで設定されたチャリティテーマから、参加者は一つを選んで一定額(個人は500円)を関係団体に寄付していただきます。

チャリティテーマは、次の7つです。①森林をよみがえらせ、育てていこう、②障がいのあるアスリートを応援しよう、③病気に苦しむ子どもと家族を励まそう、④がんを撲滅する活動を支援しよう、⑤景観を守り、美化する活動を広げよう、⑥子どもたちの心と体づくりを支えよう、⑦きれいな水を飲める世界をめざそう。

ところが、これらのテーマを決定した後に、東日本大震災が発生しました。そのため、新たに「復興に向け、ひとつになろう」というテーマを設け、寄付金を募っております。また、被災地にお住まいの742人のランナーの方々には、参加料を免除させていただきました。

◆給水・語学ボランティア、応援イベントに参加

七條 大阪を挙げての「お祭り」であることも、大阪マラソンの特色の一つです。ランナーだけでなく、大会を支えていただく約9,000人のボランティアの方々、沿道でランナーを応援して下さる約100組の「ランナー盛り上げ隊」の方々、沿道の100万人の観客とともに、大阪を大いに盛り上げていきたいと思っています。これには関西大学の学生・教職員の皆さんも参加し

■対談



楠見 晴重 (くすみ はるしげ)
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業、81年同大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。専任講師、助教授を経て、02年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年理系出身者初の関西大学学長に就任。学校法人関西大学理事。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員、社団法人日本私立大学連盟常務理事、財団法人大学基準協会理事、土木学会フェロー会員ほか。共編著書に「地図環境情報学 地下を診る最先端技術」など。

ていただき、感謝しております。

楠見 関西大学からは、20人の出走ランナーのほか、給水ボランティア400人、英語・中国語・朝鮮語の語学ボランティア23人が参加します。応援イベントにも、応援団や同好会など8団体、約70人が参加する予定です。

本学は昨年4月、堺市に人間健康学部を開設しました。スポーツや福祉をテーマに、健康の問題を地域と連携して研究することを目指しています。同学部の杉本厚夫教授らが、大阪マラソン参加者および地域住民の意識変容に関する大規模な調査を実施することになっています。また9月24日には、千里山キャンパスにゲストランナーである谷川真理さんをお招きして、大阪マラソン開催記念のシンポジウムを実施する予定です。

給水や語学のボランティア活動を行う人には、地域の人と一緒に交わり、こういうかたちの地域貢献もあることを、身をもって感じてもらって、今後の勉学や人生の糧にしてもらいたいですね。

七條 大阪マラソンの経済波及効果については、関西大学大学院会計研究科の宮本勝浩教授に試算していただき、124億円と見込まれています。大阪を元気にするマラソン大会、大阪経済を活性化させる一大イベントになることを期待しています。

◆沿道の応援がランナーを勇気づける

楠見 大阪マラソンの出発点である大阪城のある上町台地の辺りは、古来最も安定的な土地でした。市内の大半は、関西大学の校章にも使われている葎の葉が茂っていた湿地帯で、上町台地以外は起伏の少ない土地ですので、今回のコースも比較的平坦ではないでしょうか。

七條 大阪城公園前をスタートし、御堂筋、道頓堀、中之島、京セラドーム大阪、なんば駅、通天閣周辺、南港ベイエリア周辺などを通過し、インテックス大阪がゴールとなります。大阪市中心部では観光気分を味わっていただき、そしてマラソン終



盤の正念場、38キロ付近では、大阪湾の美しいベイビューがランナーを迎えてくれます。

大阪のランドマークをちりばめた、大阪マラソンでしか味わえない、とっておきのコースに仕上がったと思っています。

楠見 おっしゃる通り、水の都といわれる大阪のランドマーク的なところはほぼ網羅されており、かなりご苦労されたことと思われま。

七條 ただ、住之江公園からは、少し寂しい場所になりますので、その辺りに重点的に学生ボランティアの方々に入ってもらって、音楽やダンスなどでランナーを勇気づけていただきたいのです。

去る7月30日に大阪市中央公会堂で開かれた「大阪マラソンシンポジウム」で、有森裕子さんに基調講演をしていただきました。その中で、こんなお話をされました。有森さんは1990年の大阪国際女子マラソンが、初めてのマラソン出場だったそうです。その際に、ちょっと足の故障があり、直前まで棄権しようかと迷っていたが、マラソンデビューなのでぜひとも走りたいという気持ちが強く、走り出したところ、16キロメートルの地点で痛みが出て、やめようと思った。しかし、沿道の大阪の市民の方たちの非常に熱心な応援があって、しかも笑顔で応援をしてくれたので、それに笑顔を返しながら頑張った。その翌年に、有森さんはまた大阪国際女子マラソンを走って日本最高記録(当時)で2位になり、続いてオリンピックに出場し、バルセロナで銀、アトランタで銅と、連続メダリストになりました。有森さんは、マラソン選手として大阪に育ててもらったとおっしゃっていました。

私は大阪国際女子マラソンに30年前の第1回大会からかわっています。大会前の記者会見で、「なぜ大阪を選ばれたのですか」という質問に、招待選手からは異口同音に「大阪の沿道の応援が非常に素晴らしく、勇気づけられるから」という答えが返ってくる人が多いのです。

◆「お祭り」的に大会を盛り上げ、地域を活性化

楠見 著名なランナーも多く参加されるとお聞きしましたが、どのような方々ですか。

七條 大会を盛り上げていただく、輝かしい実績をお持ちのOB・OGランナーであるゲストランナーには、中山竹通さん、砂田貴裕さん、谷川真理さん、深尾真美さん、和田光代さんなどが参加していただきます。チャリティへの寄付を呼び掛けていただき、大会当日はランナーとして参加して下さるチャリティランナーは、秋野暢子さん、森脇健児さん、小島智子さんなどです。

大阪マラソンは、大阪らしい知恵や発想で、「お祭り」的な要素をふんだんに盛り込んでいきます。大会を盛り上げるためのプレ・イベントや商店街、府内市町村とも連携した企画なども考えています。

楠見 10月30日に、本学と連携協定を結んでいる天神橋筋商店連合会と協力し、天神橋筋商店街でロボットを走らす計画を進めています。ロボットというのは、先端技術が集まってい

私は大阪国際女子マラソンに30年前の第1回大会からかわっています。大会前の記者会見で、「なぜ大阪を選ばれたのですか」という質問に、招待選手からは異口同音に「大阪の沿道の応援が非常に素晴らしく、勇気づけられるから」という答えが返ってくる人が多いのです。



七條 昌一 (しちじょう しょういち)
1932年大阪府生まれ。51年3月、香川県立高松高等学校卒業。同年4月に大阪ガス株式会社に入社。86年株式会社オーシーズボーツ取締役、92年9月に退職(大阪ガス株式会社監査部長)。同年10月大阪陸上競技協会事務局次長、99年事務局長、2005年常務理事兼事務局長、11年顧問。10年5月に大阪マラソン開催準備委員会事務局長、同年9月から大阪マラソン組織委員会事務局長に。

ています。システム理工学部の先生や学生らがロボットを走らせるイベントは、大阪マラソンと同時に開催的に実施することにより、地域の活性化につながると思います。

七條 大阪マラソンが大阪中に大きなムーブメントを起こすことによって、市民・府民の方々が大阪の魅力を再発見し、明るい未来を肌で感じていただければと思っています。

楠見 関西大学の出走ランナーとなる人や応援に参加する人には、思いっきり楽しんでもらい、大阪に愛着をもってもらいたいと思います。給水や語学のボランティア活動を行う人には、地域の人と一緒に交わり、こういうかたちの地域貢献もあることを、身をもって感じてもらって、今後の勉学や人生の糧にしてもらいたいですね。本日はどうもありがとうございました。

LEADERS NOW!

先輩を追って跳び、 栄冠をつかむ

2011日本学生陸上競技個人選手権大会 女子走り高跳びで優勝

●体育会陸上競技部 社会学部4年次生
松本 真由子さん

6月19日、日本学生陸上競技個人選手権大会の女子走り高跳びで、体育会陸上競技部の松本真由子さんが、自己新記録を達成して優勝した。高校時代から注目された選手だったが、なかなか力を発揮できなかった。今回の優勝で弾みをつけて、9月の全日本インカレ初制覇へ向けて練習を積み、「1メートル82を跳んで優勝したい」と意気込む。



松本さんは高校時代にインターハイ、国体の2冠に輝いた実力の持ち主であったが、大学入学後は伸び悩んだ。

「高校3年間は、あっという間に駆け上っていき感じがありました。大学入学後の2年間は、けがをしたり体の調子が悪いというわけではなかったのですが、全く記録が出ない状態が続きました。調整方法や筋力を鍛えるところを変えてみたり、考え方を変える本をたくさん読んでみたのですが、だめでした」

飛躍するきっかけになったのは、1年先輩の三村有希さんの存在だった。三村さんは昨年9月の日本学生陸上競技対校選手権大会(全日本インカレ)女子走り高跳びで、3連覇を達成した。同大会同種目で、松本さんは2位になった。松本さんにとって三村さんはあこがれの先輩。「昨年は三村さんの最後の年だったので、絶対にワン・ツーを取るんだという気持ちになったのです」

そして、今年の6月19日、神奈川県平塚市で行われた日本学生陸上競技個人選手権大会。松本さんは1メートル79の自己ベストで、見事優勝を決めた。1メートル73を2回目でクリアすると、目標であった1メートル76を1回で達成。次に自己新記録への挑戦となる1メートル79も、1回で成功させて、栄冠に



松本 真由子—まつもと まゆこ
■1989(平成元)年、岡山県生まれ。岡山県立東商業高校卒業。社会学部4年次生。体育会陸上競技部に所属。2011日本学生陸上競技個人選手権大会女子走り高跳びで優勝。

輝いた。大会新記録の1メートル82は、惜しくも失敗に終わったが、これは大学最後の大会となる全日本インカレへの目標となった。

松本さんの跳躍練習は日曜日。普段は走る練習が中心。「どんなに速く走っても踏切ができなかったら上には跳べないので、自分で走り方をコントロールするリズム走に、意識して取り組んでいます。自分ではゆっくり走っているつもりでも、タイムを見ると速かったりします。例えば、10本中8本ぐらい同じ感覚で走れたら、それがいちばんいい状態です」

松本さんは自分を評して、「集中力は並外れている」という。全国大会クラスの大試合に強い。大きな試合になるほど、好成績をあげ、自己ベストを跳んでいる。プレッシャーを力にできる人なのだ。

「楽しむことがすごく好き。楽しいことをずっとしていきたい。1分間の自分の跳躍時間に入るまで、ライバルともわいわいおしゃべりをしています。そろそろ出番だとなったら、さっと切り替えて、さあ楽しもう、という感じで行けます」

インタビューの日は、社会人となった三村さんがたまたま母校へ練習に来ていた。焼けつくグラウンドへ飛び出している二人は躍動感に満ち、真夏の太陽に負けないうらい輝いていた。



松本さんが飛躍するきっかけとなった、先輩の三村さん(右・2011年卒業生)は、共に高め合い、刺激しあう仲間

関西発の 経済ジャーナリズムを担う

野次馬根性で経済界と北新地を駆け巡る

●「エンピツ工房」真島事務所
株式会社イグザミナ 代表主幹
真島 弘さん —文学部 1956年卒業—

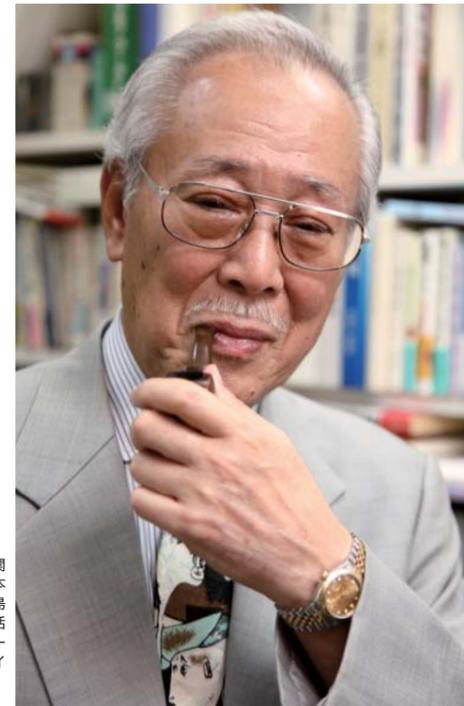
「企業にも人にも歴史がある」と語る真島弘さんは、関西の企業の歴史と財界人の人となりを書き、関西圏からの情報を発信し続けてきた。新聞記者時代から、「北新地をわが庭と心得て、蔵の一つや二つは飲んでしまった」と言うくらい、人と付き合い、大阪のまちを愛してきた真島さんの、関西の経済界と活字文化への思い入れは深い。

水都大阪の川と橋を背に、たばこをくわえた真島さん。そのたたずまいは絵になる。パイプを72本所蔵しているというダンディな真島さんは、大阪市の三津屋に生まれ育ち、川と橋の思い出が数多くある。小学校6年生で終戦を迎えた夏、神崎川で釣った魚が貴重な蛋白源となった。中学時代には神崎川の橋の上から飛び込み、高校時代には桜宮の銀橋(桜宮橋)からダイビングを敢行して、警官に大目玉を食らったという。



真島さんは旧制中学の最後の学年に所属し、途中から男女共学の新制高校に移った。今宮中学と大阪市立南高校では、後に芥川賞を受賞する作家の庄野潤三氏(1921~2009)が教鞭を執っていた。真島さんは庄野先生から、「君は新聞記者に向いている」と言われた。後年、「もの書きになれ」とも言われたそうだ。「私は、教育制度の改変で後輩ができなかった世代です。そのおかげで反骨精神が育まれたと思います。強制的に転校させられた南高校で、先輩の女子生徒に誘われて、放課後はミナミのダンスホールに通いました。ただ、当時は医者志望でしたから、勉強するつもりで茨木の春日丘高校に転校したのです。ところが、都会育ちの私はすでに大人の世界を知っており、麻雀、花札などを生徒に手ほどきしたため、不良と目されて、学校側から風紀委員を押しつけられました。卒業するころには医者には

真島 弘—まじま ひろし
■1934(昭和9)年、大阪府生まれ。56年関西大学文学部新聞学科卒業。産経新聞大阪本社入社。80年に退社し、「エンピツ工房」真島事務所を設立。経済ジャーナリストとして活動し、多くの著書を執筆。テレビのコメントーターも務める。87年9月刊の月刊総合誌「イグザミナ」の代表主幹。



向かないと気づき、関西で唯一新聞学科のあった関西大学へ入学したのです」

学生時代は酒と麻雀に明け暮れ、中之島界隈がデートスポットとなった。新聞学科では、中井駿二教授(故人)の教えを受けた。産経新聞社に入社してからも、中井教授とは北新地へ飲みに行くこともあった。北新地といえば、桜橋にあった産経新聞社から目と鼻の先。若くして、経済界、色街で勇名を馳せることになった。

「連日連夜、はしご酒して午前様。翌日は新聞記者としての取材活動に精を出していたわけですから、若さと体力のたまものでした。野次馬根性が経済記者に向いていたのでしょうか。夜勤の日以外は、ほとんど社には上がらず、北新地を徘徊して、バーやクラブで経済人と交流を深め、酒を飲むのが仕事でした」

真島さんは、酒の席であいさつした財界人の経歴などを入念に調べ上げ、夜討ち朝駆けでニュースを追った。その記事は産経新聞の紙面だけでなく、「財界」「経済界」「東洋経済」などの経済誌にも載った。やがて、デスク、部長を務め、1980年に退社。「エンピツ工房」真島事務所を設立。経済ジャーナリストとして活動し、多数の本を執筆、テレビやラジオにも出演した。1987年9月には、経済主体の総合雑誌の分野に乗り出し、月刊「イグザミナ」を創刊。「検証」を意味するこの雑誌は、経済も出版も東京一極集中が進むなか、四半世紀近くも継続している。真島さんは代表主幹として、常に健筆を振ってきた。企業の東京志向はますます加速しているが、関西から情報発信を続ける姿勢は崩さず、自ら「生涯の道楽」と言いつつ、信念を貫こうとしている。



真島さんが四半世紀近く発行している「イグザミナ」

■研究最前線

現場の“感覚”を活かすスポーツ科学の研究

頭で理解して、
感覚で実践する

二軸感覚、二軸動作、常歩、重力の活用とは？

●人間健康学部
小田 伸午 教授

スポーツの世界では、これまで常識とされた考え方が覆ることがある。人間健康学部の小田伸午教授は、“主観と客観のずれ”をテーマに、身体運動を総合的に研究している。「教育・コーチングと分析的な理論の追究の間には大きな壁があるが、その壁は見方を変えれば容易に取り除ける」という。頭で理解して、感覚で実践することにより、スポーツの世界は広がる。

▲小田教授の著書



■主観的・感覚的な真実と客観的・物理的な真実

《小田教授は、スポーツ科学や身体運動に関する研究者であるとともに、実際のスポーツ現場でコーチとして指導し、選手の育成に携わってきた。1983～1990年に日本ラグビー協会強化委員、日本代表チームトレーニングコーチを、1984～1989年には京都大学ラグビー部コーチおよび監督を務めた。そもそも小田教授とスポーツとのかわり、中学校時代に始めた陸上競技から。中学3年のとき、三段跳びで当時の神奈川県記録を塗り替えた。東京大学(教育学部体育学科)では、ラグビー部員として活躍した。しかし、京大ラグビー部の指導者としては、なかなか成果をあげられなかった。》

小田 期待に応えられず、つらかったですよ。それで、いったんラグビーの現場を離れて、研究論文を読むだけではなく、自分で新たな研究を始めたのです。10年ほど続けるうちにいろんなことが見えてきました。

例えば、右手と左手の握力を同時に発揮すると、1+1=2にならず、5%から10%落ちてしまう。筋電図や脳波の測定を行うと、働く筋は同じでも、両手同時運動の場合は片手運動の場合に比べて神経系の活動レベルが抑制されていることが分かりました。意識(心理)は片手、両手ともに最大のつもりでも、神経系活動(生理)が低下することで、アウトプットされる筋出力(物理)は低下している。このように、身体運動には意識(主観)と結果(客観)がずれるという問題がつきまとうのです。この“主観と客観のずれ”をテーマに、身体運動を総合的に研究する方



向に向かいました。スポーツ科学でアウトプットされる物理的な結果のデータに対して、選手の方は我関せずということもあるし、全然違うふうに感じていることもあるのです。これはすごいテーマをいただいたと思えて、人生に光が差し込みました。

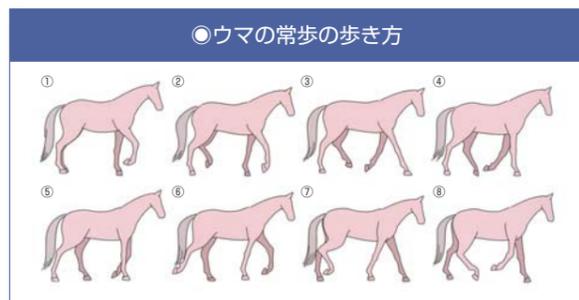
野球で150キロ以上の速球を投げて、打者に速いボールだと感じさせないと打たれてしまう。速いか遅いかは主観的な感覚の世界であり、感覚の真実であって、客観的・物理的な真実とは別な分野の真実なのです。スポーツ科学で、現実の感覚をつぶしてはいけません。現場を活かすためのスポーツ科学でなければなりません。

■二軸走動作=常歩(なみあし)に注目

《小田教授は、運動の基本となる歩き方や走り方、投げ方を研究し、二軸感覚、二軸動作に注目している。それは馬の歩き方からヒントを得たという。》

小田 京都大学の馬術部の馬が歩いているのを見たとき、ハッと気づいたのです。馬の大きなお尻が小さく左右に揺れている。馬の動きの軸は、体の中心にあるのではなく、体の左右に二つあるのだと。

馬は、左の前後肢の2本で体重を支え、右の2本の脚が宙に浮く瞬間があります。逆に、右の前後肢の2本で体重を支え、左の2本の脚が宙に浮く瞬間があります。人間も、体重を左右の股関節に乗せながら、左右の足を地面に着けて歩きます。したがって、左右の股関節に、動作の基点となる2本の軸ができると考えたのです。馬は、右後肢→右前肢→左後肢→左前肢の順に、足を前に出して前進します。それは、右の前後の肢、左の前後の肢における同側感覚の動きです。



以前、日本人の古来の「なんば」と呼ばれる歩き方が話題になりました。これは、前に出す足(遊脚)と同じ側の手と同時に前に出るというふうに通じられています。しかし、本当のなんばとは、体重を乗せた側の足と腕の感覚のことをいうのです。馬の歩きでいえば、後肢を踏み込んで同側の前肢が前に出ていく動きです。



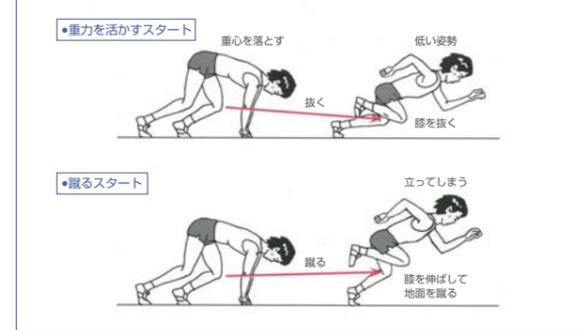
歩くポーズ、走るポーズは自然になんばになる

足と同側の手の感覚がなんば感覚であり、左右軸の感覚です。スポーツの走動作では、左右の軸を巧みに切り換えていく動きになります。私たちの研究グループでは、スポーツ向きの二軸走動作を、なんばと呼ぶ前に、「常歩」という言い方をしています。

■客観的な知見を自分の問題に翻訳する

《「スポーツは筋力・筋肉がすべてではない」という小田教授は、世界のトップアスリートの動きを研究し、二軸動作や常歩などの動作感覚を体得することの重要性を説いている。また、骨・筋肉・関節、脳・神経など、自身の体について理解を深めることは、他人事ではなく、自分の問題につながるという。さらに、体の中の力だけでなく、体の外にある重力を有効に使う体の動かし方もある。》

◎「膝を抜いて重力を活かしたスタート」と「蹴るスタート」の違い



小田 野球のイチロー選手、サッカーのクリスティアーノ・ロナウド選手など、超一流のスポーツ選手は、つま先で蹴るのではなく、膝を抜いて、かかとで押すようにして倒れ込み、重力に引っ張ってもらいながら、瞬時に動き出します。体を前に進めるときは、つま先ではなく、かかとなのです。

陸上・短距離の福島千里選手は、「ヨーイ」でやや高めに腰を上げておき、「ドン」で両手を離れたときに、前に置いた脚の膝を抜きます。号砲が鳴ると、膝の高さが低く落ちることが見て取れます。福島選手は、筋力を100%使って意識的に蹴ろうとはしていません。力まずに抜くことで、重力の力を活用して、



堺キャンパス祭で開かれたワークショップ

落下しながら倒れるように出ていきます。だから、低い姿勢のまま、大地を後方に押すことができ、体を前に進める反力を大地から有効にもらって素早いスタートを切ることができます。《6月26日に開催された堺キャンパス祭で、小田教授はスポーツや身体動作に関するワークショップを開き、腕相撲を例に、重力の動きを説明した。最後に、スポーツを学ぶ人へのメッセージを――》

小田 腕相撲は、座っていると部分的な筋力の問題になります。立っていると、状況が異なります。足の裏をわずかに地面から離すことにより、私の90キロの体重が乗った状態になり、一瞬、私が重力を使って落下するのです。体重が丸ごと重力落下するその力が相手の腕にかかるのです。全部、地球とのかかわりで起きます。こうやって感覚的に力という概念を学ぶことができます。スポーツって、こんなに楽しい。物理(客観性)と自分(主観性)の両方がないと、できないことです。

学びのポイントは、いつでもそこに自分があること、自分が関係していることです。そうでないと、自分の人生の役に立たない。というよりも、学んだことに意味がないじゃないですか。ジコチュウの自己ではなくて、そこに客観という自分以外の第三者的な知見があり、自分がそれをどう翻訳して活かすか、です。自分の問題に置き換える、つまり翻訳することで、自分に無関係なものが増えてきて、すべて自分の問題になる。こんなのは自分とは関係ないと思っていたことが、自分にいちばん大事な問題かもしれないのです。自分の体を知ること、動きが変わり、運動の感覚も変わってきます。

足の裏を地面から離し、体重が重力落下する力を利用する、立って行う腕相撲。感覚的に力の概念を学ぶことができる▶



■研究最前線

インタラクションデザインの研究

機能と使いやすさを両立させる

実世界指向インタフェース、自然言語と情報可視化の協調方式を追究

◎総合情報学部
松下 光範 教授

総合情報学部の松下光範教授の専門領域は、インタラクションデザイン。ユーザの興味や関心に基づく情報編集、実世界指向インタフェース、自然言語によるインタラクションを主なテーマとして、機能性(インテリジェンス)と操作性(インタラクション)とを両立させるシステムの実現、その方法論の確立を目指した研究を行っている。

■対面協調作業を支援するテーブル型ディスプレイ

—まず、研究の概要から説明してください。

ICT (Information Communication Technology) の高度化やネットワークの普及によって、情報処理システムの利用場は格段に増加していますが、すべてのシステムが必ずしも使いやすいものになっていないのが現状です。それを少しでも解消するために、ユーザとシステムとの間のやりとり(インタラクション)に注目し、機能と使いやすさが両立するようなシステムを実現するための研究を進めています。①ユーザの振る舞いや要求の分析・モデル化、②新しいシステムのデザイン創出、③

システムの実装と評価、を一つのサイクルとし、このサイクルを繰り返していくことで、使いやすいシステムはどのようにあるべきなのかを探求しています。

—具体的にどのようなシステムなのか、例を挙げてください。

一つは、私がNTTの研究所に勤務していたころから東京大学と共同で研究を続けている、対面協調作業を支援するインタラクティブシステムです。ルミサイト・テーブル(Lumisight Table)と名づけた、新しいタイプの机型のディスプレイで、4方向から違う映像を見ることが出来ます。写真などの情報は、各方向に正対するように回転させて提示します。机の中に置いた4台のプロジェクターを同期させ、机の内部に設置した赤外線カメラで机上に置かれた



ルミサイト・テーブル (Lumisight Table)



物体や人の動作を認識し、それに応じて反応するディスプレイを実現しています。

このディスプレイを使うことで、一つの机を囲んで数人がコラボレーションするためのシステムが実現できます。例えば、地図を見ながら多国語で議論するとき、それぞれの母国語で自分の方向に向かって表示された情報を眺めつつ、メンバー全体で同じ向きの地図を共有して議論することができます。地図の部分のみを同じ方向に表示できるので、地図上のある一点を指さして他人に伝えることもできます。もちろん、違う資料を出すことも、同じ資料を出すこともできます。

インタラクションデザインは、人がコンピュータとのやりとりを円滑にすることによって、より使いやすいシステムを創出したり、コンピュータを介した人同士のコミュニケーションやコラボレーションを活性化したりすることを目指すものです。

■言葉による問いかけに可視化表現で応答

—先生の研究テーマの一つである「自然言語によるインタラクション」の例は？

自然言語と情報可視化の協調方式に関する研究です。ユーザが自然言語でシステムに質問し、システムが可視化表現(グラフ)でユーザに応答するインタラクティブシステムがその一例です。これは、ユーザが多量のデータから有益な情報を見いだすために行う探索的な分析行為を支援する技術の実現を目的としています。

例えば、このパソコンの中には日本の各地で10年間に降った雨の量の毎日のデータが入っています。それに対して、「何年から何年までの関東地方の降水量が見たい」と入力すると、その言葉をコンピュータが解釈して自動的にグラフを描きます。さら

● Knowledge Interaction Design ●

に、関東地方と近畿地方を比較するために、近畿地方のデータを追加します。どれぐらいの割合になっているのか、「割合を見たい」と入力すると、割合の表示に変わり、変動の幅が見えてきます。降水量を年単位から月単位にして比べることも可能です。

このシステムは、断片的な言葉で問いかけられた質問を、文脈を考慮して理解し、それまで描かれていた内容と新しい内容をアニメーションでつないで見せることができます。システムの内部で日本語の解釈をしており、それに合わせて適切な表現を考えてどんどん書き換えていきます。自然言語の解釈などは容易に見えるかもしれませんが、欠けている言語表現を補う、文脈を保持しておく、前の質問に戻った場合の分岐を把握する、不要な文脈は削除して必要な文脈のみを残していくなど、複雑な処理をやっています。そうすることによって人間の思考を妨げることなしに発想を支援しつつ、最終的に自分のほしい結論にたどり着くことができるシステムが実現できます。人間の思考は、ある情報やグラフから一気に最終的な結論が見えてくるようなことはなくて、次から次へと新しい観点を見つけて、徐々に理解を深め新しいことに気づいていくので、システムもそれに応じた応答を返す必要があるのです。



■バーチャル世界とリアル世界をつなぐ

—「実世界指向インタフェース」とは？

キーボードやマウスを離れて、コンピュータを意識しないでシステムを利用できるインタフェースのことで、ルミサイト・テーブルもその一つです。また、子どもたちを対象とした新しいメディア表現として、影絵に注目し、影の世界とリアルの世界をつなげて、空想したものが映像になるような実世界指向インタフェースの研究もしています。例えば、棒の付いた円盤をかざすとその影が木になって、それを揺ると果物が落ちてきたり、引っこ抜くと根っこが生えていたり。子どもの頭の中にある空想を影の世界で映像として表したような、リアルとバーチャルの間にある遊びを実現しています。

また、手袋の中にセンサを組み込み、狐の手を動かすことによって、画面のなかのキャラクターも右を向いたり左を向いたり、頭を傾けたりするようなシステムも作りました。これは、学生に電子工作の実習の一環として作成させたものです。バーチャルとリアルの世界をつないでいるので、バーチャル・リアル・パペットと名づけています。これらはエンターテインメン



▲影絵が子ども向けの新しいメディア表現に
▼バーチャル・リアル・パペット



ト・コンピューティングと呼ばれる分野に属するものですが、この分野は、これから日本が主導権を握ってやっていける、新しい面白い分野だと思います。

誰をターゲットに、どういう課題を解きたいのか、そこにフォーカスして最適なシステムを作っていくことが大切です。人間が得意な部分とコンピュータが得意な部分があります。コンピュータは、大量なデータを高速に計算することは得意ですが、新しいものを見つけたり、違う観点から見たりすることは苦手です。一方人間はグラフなどを眺めて、直感的に「ここに何か宝の山がある」と感じ、それを見つけることができます。だから、コンピュータの良いところと人間の強みをうまく生かせるようにすることが、私の研究の狙いです。

—教育・指導面で重視していることは？

手を動かしてモノをつくるのが大切です。そのアイデアが本当に使えるかどうかは、実際につくってみなければ分かりません。また、学会や研究会での発表、展示会への出展などを通じて、積極的に情報発信を行っています。卒業までに一度は学会発表してもらおうことを目標にしています。内輪だけでしか通用しない研究の成果ではなく、学会で評価してもらえるようなレベルを目指して指導しています。

●東日本大震災に関する関西大学の取り組み

経済的支援を継続、ボランティア活動を展開

関西大学では、東日本大震災発生以来、被災者の皆様とともにこの苦難を乗り越えるため、さまざまな取り組みを継続するとともに新たな活動を開始している。その一部を報告する(大学ホームページに順次掲載)。

◆被災学生(「福島第一原子力発電所事故」による被災を含む)に対する経済的支援

本学被災学生に対する経済的支援を図るため、「災害救助法適用地域」における被災の状況に応じて、平成23年度に限り次の特別措置を講じている。加えて、平成23年度秋学期入学希望者および平成24年度春学期入学希望者について、入学検定料を全額免除することになっている。

区分	給付基準	授業料等の減免	修学支援助成金	植田特別奨励金
1	家屋の全壊、焼失または流失、あるいは学費支弁者の死亡等の被災者(「福島第一原子力発電所から半径30km圏内に居住する被災者」含む)	通年全額	36万円×2学期	24万円×2学期
2	家屋の半壊などの被災者(原簿区分なし)	通年半額	24万円×2学期	24万円×2学期
3	家屋の一部損壊などの被災者(「上記1以外の福島県に居住する被災者」含む)	—	12万円×2学期	6万円×2学期

◆被災された一般の方々への「関西大学震災義援金」

被災された一般の方々を支援するため、義援金受入口座を開設し、災害救済のための義援金を広く募っている。当初、この義援金の募集期間は6月30日までとしていたが、募集期間を9月30日まで延長し、引き続き復興への支援を行っている。

7月31日現在の義援金額は87件、6,941,281円(日本赤十字社への送金分含む)。本義援金は、日本赤十字社が発行する受領証をもって、寄付金控除を受けることができる。

【お問い合わせ先】

学校法人関西大学 財務局出納課 電話：06-6368-0022

◆関西大学の被災学生への「関西大学災害特別義援金」

本学被災学生の学業等を支援するため、「関西大学災害特別義援金」を本学の理事、監事、顧問、評議員、職員、校友会代議員、教育後援会・千寿会委員に募っている。7月31日現在の義援金額は、1,532件、31,933,602円。これを財源として本学被災学生に対し、修学支援助成金を給付した。今後も継続的に支援するため、5月31日までとしていた募集期間を9月30日まで延長し、募集を続けている。本義援金も、寄付金控除を受けることができる。

【お問い合わせ先】

学校法人関西大学 財務局資金課 電話：06-6368-1137

◆社会安全学部企画展～伝えよう震災、学ぼう安全～

5月28日、高槻ミュージャンパスで、「社会安全学部企画展～伝えよう震災、学ぼう安全～」が開催された。社会安全学部生が中心となって企画・運営したもので、当初はキャンパス祭を開催する予定であったが、内容を変更し、震災をテーマにしたイベントを実施することになった。地震発生時の災害救助犬による捜索活動についての講演と救助犬による実演、被災地の写真や資料パネルの展示、液状化現象が起こる仕組みを紹介した実験コーナー、防災グッズの紹介コーナーなど、初の企画展は多くの来場者の関心を集めた。



◆勉強机を再生して被災地に送る「勉強机プロジェクト」に参加

被災地では勉強机が足りない一方で、全国の廃校などには、使われていない勉強机や椅子がたくさん取り残されている。それらを新品同様に再生し再利用する「勉強机プロジェクト」が始まっている。NPO法人子ども育成支援協会が、この震災ボランティアを発案し、文部科学省からもこれを後押しする通達が出された。4月29日、社会安全学部の学生と社会安全研究科の院生ら41人が、高槻市内にある港製器工業株式会社で、勉強机の再生作業のボランティアに参加し、104台の勉強机と椅子が再生された。その後もボランティア活動は継続され、再生した机と椅子は順次、被災地に届けられている。

◆「被災地に野菜を送ろうプロジェクト」に参加

5月24日、兵庫県加古郡播磨町にある兵神ファームで実施された「被災地に野菜を送ろうプロジェクト」に、社会学部大西ゼミ生32人、商学部長谷川ゼミ生3人が参加した。このプロジェクトとは、兵神機械工業株式会社の友藤社長が、自らの阪神・淡路大震災の経験から、社会貢献したいという思いで始めた同社と大西ゼミによる東日本大震災被災地支援ボランティア活動のことである。被災地に水耕栽培された新鮮な野菜を届ける今回のボランティア活動では、段ボール箱80個分の小松菜・水菜・ほうれん草の収穫、下葉処理、計量、袋詰め、箱詰め作業に従事。野菜は、被災者に提供する食事に使用された。



文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

2件の研究が採択、全国第1位の実績

- 「東アジア文化資料のアーカイブズ構築と活用の研究拠点形成」
- 「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究」

文部科学省平成23年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に、関西大学が申請した2件の研究プロジェクト「東アジア文化資料のアーカイブズ構築と活用の研究拠点形成」、「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究」が採択された。平成20年から始まったこの支援事業において、本学が選定を受けたのは14件となり、全国第1位の実績を誇る。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業は、各大学の経営戦略や研究戦略に基づいて行う研究基盤の形成を、国が競争的資金によって支援するものである。最先端の研究装置や設備の整備費と5年間にわたる研究費が補助され、わが国の科学技術の進展に大きく寄与することが期待されている。

今年度は、全国の採択率が38.4%(過去最低の率)にとどまり、関関同立のなかでは関西大学の2件のプロジェクトのみが採択された。この結果は本学の研究水準の高さを示すものといえる。



東アジア文化資料のアーカイブズ構築と活用の研究拠点形成

研究組織名：アジア文化研究センター
研究代表者：松浦 章 東西学術研究所所長・文学部教授

東西学術研究所を中心に蓄積されてきた本学の東アジア文化研究の卓越性は、平成19年度グローバルCOEプログラムに採択されたことが示すように、内外から高い評価を得てきた。今回のプロジェクトは、関西大学図書館などに本学が所蔵する資料をコアとして、近代前半までの東アジア文化研究のための多種多様な学術リソースをデジタル化し、その資料的性格の検討・解明の成果を「解題」として刊行したうえで、国内外の研究者に広く開かれたアーカイブズとして構築・公開することを目的としている。

本学所蔵のアジア関係資料には、内藤文庫(内藤湖南)・増田文庫(増田渉)・長澤文庫(長澤規矩也)などの特色ある個人文庫に加え、大坂の漢学塾泊園書院の蔵書を収めた泊園文庫をはじめとする大坂の学術や絵画関係資料、日中交渉史関係史料などの豊かなコレクションがある。書簡や手稿本など未公開資料も多く含まれ、いまだ資料の全貌が把握されていないものもあり、写本などにはその脆弱性から公開できないものもある。本研究では、まずこれらをデジタル化し、全内容を俯瞰できる形でアーカイブズ化して公開する。また、零細なものも含めた性格の異なる資料群を種々取り上げて、多様な資料のアーカイブズ化の指標となるモデルを提示することを目指す。

急速にデジタル化の進行する今日の人文科学において、新しい資料研究の方法論を構築し提示すること、それが本研究の目指す最終的な目的である。

集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究

研究組織名：地域再生センター
研究代表者：江川直樹 先端科学技術推進機構地域再生センター長・環境都市工学部教授

わが国の人口拡大・都市化の時代に大量に建設された集合住宅団地は、住宅の老朽化や設備の陳腐化などの物理的な問題のみならず、高齢化率の上昇やコミュニティの弱体化などの社会的問題をも抱えている。しかし、大量のストックがあり、資金面の問題等から建て替えは困難で、その多くがストック活用による再生が目ざされている。その数は膨大で、旧公団賃貸住宅77万戸のうち57万戸がストック活用(建物の大規模改修など)の対象とされており、同様の事情を抱える公営住宅の総数は220万戸にものぼる。

本研究の目的は、事業主体が造りやすく管理しやすい画一的な空間構成となっている集合住宅団地を、住宅等のストックの活用を図りつつ、住民が守り育て自立的に更新していけるような“まち”に再編する技術を開発し実践に活かすことにある。

団地再編の技術は、団地建設の技術とは全く異なる技術であり、団地再編が社会的に重要な課題となっているにもかかわらず、わが国のそれを担うべき体制は欧米諸国に比して弱体である。団地再編の指針およびそのシステムの総合的な検討を主導する主体が、残念ながら存在しない。本研究では、団地再編の総合的な課題を、「空間」「コミュニティ」「公共政策・マネジメント」の三分野から検討し、それらをいかに実践的に総合化させるかという視点から進める。

団地再編は、住民の参画を得て地域の民間活力を導入しつつ遂行されるべき“まちづくり”であり、地域再生・活性化にも貢献する。

第1回堺キャンパス祭を開催

「スポーツ」「福祉」を学ぶキャンパスで地域交流

Hop Step Jump!! ～みんなを笑顔に～



開設2年目となる堺キャンパスで6月26日、「Hop Step Jump!! ～みんなを笑顔に～」をテーマに、第1回堺キャンパス祭が開催された。学生・教職員が一体となって、多数の来場者とともに祭りを盛り上げた。

2010年4月に開設された堺キャンパスの人間健康学部は、「スポーツ」「福祉」をキーワードに、人間の健康を探究することを教育研究の目的としている。地域住民が健康で豊かな生活を享受できるように、堺市をはじめとする地方自治体と連携して各種支援事業を展開し、積極的な地域貢献を行っている。

今回が初めてのキャンパス祭のテーマは、「Hop Step Jump!! ～みんなを笑顔に～」。学生のイベントに加え、教員による地域住民対象のスポーツ実践ワークショップなども実施され、世代を超えて大勢の方に楽しんでいただける内容となった。

また、3月に発生した東日本大震災の被災者にエールが届くことを祈って、チャリティー企画や募金活動を行い、震災の義援金として寄付することになった。

このキャンパス祭は、人間健康学部における日ごろの教育研究の成果を発表する場でもある。小田伸午教授によるワークショップ「スポーツ選手なら知っておきたい『からだ』のこと」、原田純子准教授の公開授業「ダンス創作作品発表会」、灘英世助教による「プロジェクトアドベンチャー体験会」、小室弘毅助教による「ヨガ教室」など、バラエティに富んだ企画が好評を博した。

特設ステージでは、人間健康学部の学生がダンスや歌を披露。普段の練習の成果を存分に発揮した。応援団の演舞やフットサル大会(堺キャンパスNo.1決定戦)も行われた。模擬店・フリーマーケットは、人間健康学部の学生だけでなく、堺キャンパス近隣の団体や地域住民の出店で賑い、地域と学生との交流がさらに深まった。

来場者は2,000人超を記録。いずれはこのキャンパス祭が「堺の名物イベント」になることを期待したい。



◀◀来場者が2,000人を超えた「堺キャンパス祭」。ステージでは応援団の演舞や、ダンスなどが披露された

◎第4回関西大学「氷の甲子園」を開催

ジュニアフィギュアスケート演技会・トップスケーターエキシビジョン

「高橋大輔・織田信成先輩に続け！」



関西大学高槻キャンパスアイスアリーナで、7月9日、10日の両日、第4回「氷の甲子園」が開催された。体育会アイススケート部の高橋大輔さん(文学研究科M2)と織田信成さん(文学研究科M1)らを目指して練習に励んでいる小中高生約80人が、各クラスで演技を競った。

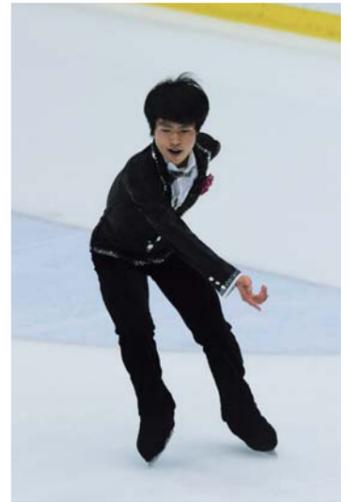
第4回関西大学「氷の甲子園」には、これから世界で活躍することが期待される小学生から大学生までの選手が参加した。演技会では小中高生約80人が技を競い合い、表彰式にサプライズで登場した織田信成さんは「みなさんのレベルの高さに驚いた」と、選手らを讃えた。

エキシビジョンでは、トップスケーターが次々に登場し、華

麗な演技を繰り広げた。名前を挙げると、山田耕新(政策2)、村元小月(文3)、瀬藤愛里(商4)、國分紫苑(社2)、町田樹(文4)、田村岳斗(長野オリンピック日本代表、プロスケーター)の皆さん。町田さんは完成したばかりという来季SPを初披露するなど、500人の観衆はその華やかで力強い舞に酔いしれ、会場は大いに盛り上がった。

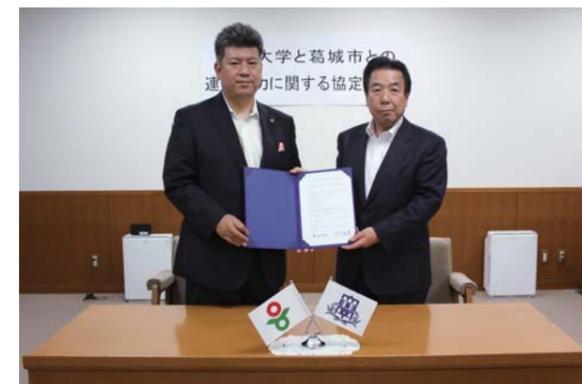
演技会では、初等部4年生の本田真凜さん、1年生の本田望結さん姉妹が、ノービスAクラス、Cクラスで優勝。

関西大学中等部在籍の期待の星、2年生の宮原知子さん(戦績2011トリグラフトロフィー2位)と1年生の本田太一さん(戦績2011トリグラフトロフィー優勝)も出場。宮原さんは、小柄な体からは想像もできないパワフルかつエレガントなスケATINGで、本田さんは持って生まれた華やかな雰囲気、ともに将来が楽しみな逸材。「氷の甲子園」から、世界を目指そう！



エキシビジョンで、来季SPを初披露する町田樹選手▶

奈良県葛城市と連携協力に関する協定を締結

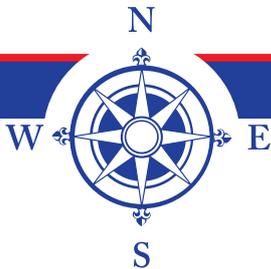


関西大学と奈良県葛城市は、連携協力に関する協定を締結することで合意に達し、5月27日に協定書の調印式を行った。

同市は平成22年4月に施行された「子ども・若者育成支援推進法」による「子ども・若者支援地域協議会」が設置された全国でも先進的なモデル地区であり、本学の臨床心理専門職大学院・石田陽彦教授が以前から同市でひきこもり対策にかかわってきたことが、同協議会設置の契機となった。昨年度からは「社会的信頼システム創生センター(STEP)」も、アンケート調査・分析などで連携協力実績があり、全学的な連携が進められている。

今後も、子ども・若者育成支援の分野を軸にした、各種調査・研究、内閣府委託による「子ども・若者支援地域ネットワーク形成のための研修会事業」などで連携を行っていく予定。本学と自治体との連携協定としては12例目となった。

◀連携協力に関する協定を締結した、山下和弥葛城市市長(左)と楠見晴重学長



英語指導力開発ワークショップを実施

関西大学大学院外国語教育学研究科は、7月25日から8月5日まで計10日間にわたり、国・公・私立中学校・高等学校の外国語科(英語)を担当する教諭または講師を対象として、「英語指導力開発ワークショップ」を実施した。田尻悟郎教授を中心に、6人の本学教員が講座を担当。英語指導技術を高めたい、新しい英語指導法を知りたい、生徒と心が通い合う授業がしたい、生徒の内面を引き出す授業がしたい、生徒同士が温かい気持ちを持って関わり合う授業をしたいと願う英語教員の方々に向けて、新しいタイプの英語指導力開発の機会を提供している。今回も、学習者心理をつかんだ指導技術、教師と生徒の信頼関係構築などに焦点を当てつつ、効果的な教科書の使い方など、充実した内容のワークショップとなった。

小・中・高校生向け夏休みセミナー開催



夏休み中の小・中・高校生が多数参加した各種セミナー。写真は機械工学セミナー「車いすの力学」での様子

関西大学では、大学の教育・研究の成果を広く社会に還元できるよう、地域・一般の方々を対象に各種公開講座・セミナーを開催している。今年も学校の夏休み期間に、次のような小・中・高校生向けプログラムが実施された。

機械工学セミナー「車いすの力学」/システム理工学部、法学部セミナー「考えてみよう、刑事裁判のこことー裁判員と検察審査会」/法学部、高校生のための心理学セミナー「人のこころの仕組み〜心理実習を体験しよう!〜」/社会学部、日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス(飛鳥時代の古墳築造技術とその背景を探る)」、ワクワク夏休み科学実験/三大学医薬連環科学教育研究機構、第12回サイエンスセミナー/システム理工学部・環境都市工学部・化学生命工学部、日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス(みえない世界を関西大学で体験してみませんか?)」、身体と頭を使って学ぶ健康セミナー「現代人にとって健康とは何か?」/人間健康学部、関西大学・高槻市主催 高槻市大学交流センター事業「アイデアワークショップ」

関大一中・東野教諭が南極地域観測隊夏隊に同行



南極・昭和基地(写真提供:国立極地研究所) 東野智瑞子 教諭

関西大学第一中学校の東野智瑞子教諭が、第53次日本南極地域観測隊夏隊の同行者として、平成23年11月25日に日本を出発する。これは、情報・システム研究機構国立極地研究所が昭和基地から衛星回線によるTV会議システムを利用して「南極授業」を行う教員を募集したところ、南極の温暖化に興味を持っていた東野教諭が応募し、選考により派遣されることが決まった。派遣教員は2人で、私学の教員では初めて。帰国日は平成24年3月19日の予定。「ぜひ、野生のペンギンたちを観察したいと思っています。太陽の沈まない日々や昭和基地での実生活の様子についてレポートし、南極に対する興味関心を持ってもらえるような授業を実現させたい」と、抱負を語る東野教諭の「南極授業」が今から楽しみだ。

サッカー部の櫻内渚さんがジュビロ磐田へ

体育会サッカー部の櫻内渚さん(政策創造学部4年)が、2012シーズンの新加入選手として、ジュビロ磐田への加入が内定した。これで、関大から4年連続でJリーグが誕生する。



ジュビロ磐田への加入が内定した櫻内さん(左)(写真提供:関大スポーツ編集局)

櫻内さんは、攻守にわたりハードワークができる右サイドバックで、身体能力が高く、1対1の守備には絶対の自信を持つ。同時に、持ち前の運動量でサイドを駆け上がり、随所で攻撃にも参加。空中戦にも強く、正確なパスやクロスを送り、ゴールを演出する。大学最後の1年間、活躍を続ける櫻内さんから目が離せない。



また、同じくサッカー部の寺岡真弘さん(政策創造学部2年)が、JFA・Jリーグ特別指定選手として、財団法人日本サッカー協会に承認され、ヴィッセル神戸が受け入れ先となることも決まった。

◀ Jリーグ特別指定選手として承認された寺岡さん(写真提供:関大スポーツ編集局)